

令和5年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる  
「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

令和6年4月1日現在

研究課題名	ロシアのチュルク系民族間の空間認識における比較研究	
申請者	氏名	所属機関・職
	後藤 正憲	農林水産政策研究所・政策研究調査官

## 研究成果の概要

ロシアのチュルク系民族の中でも、歴史や自然環境、生活様式において、互いに大きく異なるサハとチュヴァシの間では、それぞれに固有で典型的な空間認識において、際立った違いが見出せる。永久凍土の広がる東シベリアで、長い年月をかけて土壌が浸食を受けることで、針葉樹林の間に形成された草地をサハ語でアラースというが、牧畜を生活の糧とするサハの人々にとってアラースは、良質の牧草を生み出す地形であるとともに、生活のあらゆる側面でサハ人と関わりの深い景観となっている。それに対して、チュヴァシ人の中では、ロシア人の支配を受けてロシア正教が深く浸透するようになってからも、チュヴァシの在来信仰がその世界観の根幹を作り上げていた。中でもキレメチという概念は、もともと人工的に空間を区切って作られた儀礼の場であったのが、後に人里離れた山や谷、古木など自然の形象とされるようになるといったユニークな変化を遂げながら、人々にとって典型的な景観を作り出している。

サハのアラースとチュヴァシのキレメチを比較すると、両者の違いは歴然としている。サハのアラースは、東シベリアの自然が作り出した牧草地で、人々にとって有用性が高く、牧畜にとってなくてはならないものとされる。一方、チュヴァシのキレメチは、中央ユーラシアの歴史の中で受け継がれてきた信仰の対象でありながら、普段は人々から遠ざけられ、農耕に関してまったく有用性のない場所に見いだされる。しかし、景観をキーワードに2つの事例を並べてみることによって、両者がともに人為と自然の間を揺れ動いていることや、そこに住む人々にとっては、日常生活の具体的な現実のあり方を映し出す前景と、それと表裏をなしていつでも浮上する可能性を持つ後景との間で、絶え間のないせめぎ合いが生じているという点に、共通点を見出すことができた。こうした前景と後景の奥行きのある景観の捉え方は、他にも広く一般的に空間認識の理解を深める上で、応用することができると考えられる。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

後藤正憲「景観の物語を語る——住まうことの重層性」河合洋尚・松本雄一・山本睦編『景観で考える——人類学と考古学からのアプローチ』、臨川書店（2023年12月）、205-220頁。謝辞有。

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）  
なし

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。